

ハインツ・ベッヘルト編

歴史的仏陀の年代論

原 實

「史書なきインドの歴史」の上で、特定の歴史的人物の年代を論じた試みの中、過去西欧で国際研究集会の形を取ったものに A. L. Basham の主催した Kaniska 王のそれがある (London, 20-22 April 1960: Papers on the Date of Kaniska, Leiden 1968) が、同種の集会が近時「歴史上の仏陀」について催された。Göttingen 大学教授 H. Bechert が主催した「第四回仏教研究集会」(Symposien zur Buddhismusforschung, Hedemünden 11-18 April 1988) がそれであり、その大会紀要が本書の内容を成している。

仏教の開祖 Gotama Buddha の誕生から涅槃にいたる80年の生涯は、多少の神秘的潤色、超人的誇張はあるにせよ、所謂「仏伝文学」によってその大要を知り得る。しかし、その歴史的生存年代を確定する事は学問の現段階では不可能である。過去に提唱された年代論は実に2420B. C. より290 B. C. に亘り、一般に学界で承認されているものの中でも所謂 (Uncorrected) Long Chronology (=南伝 544/543B. C.), Corrected Long Chronology (486-477=衆聖点記), Short Chronology (=北伝 400-383-368) の間には約200年の開きがある。開祖の生存年代は信者の一大関心事であり、又それはキリストや孔子のそれと同様に世界史の上で極めて重要な意義を有しているにも拘わらず、仏滅年代は7世紀入竺した玄奘三歳の時代に既に不明とされた(大唐西域記4.4.4)。本邦学界に在ってもそれは活発な論議を呼び、又仏滅2500年記念世界仏教徒大会が南伝に基づいて1956年に開催された事も記憶に新しいが、心ある研究者は学問的根拠を欠くとしてそれへの参加を拒否した。

久しくセイロンの所伝によって仏滅年代を486B.C. としていた欧州の学界は近時編纂者 H. Bechert を中心に西暦前4世紀迄それを下げようとする気運に傾き、ここに内外の専門学者を糾合してこの問題を今一度集中的に審議する事となった。参加者はドイツ語圏を中心に約50名、その中には

仏教学者はもとより、地域的にも南アジア、中央アジア、東アジアの専門研究者が含まれ、又方法的にも考古学、歴史学、言語学、文献学、哲学、西洋古典学と多岐にわたっている。本邦からも平川彰、山崎元一、土田龍太郎、湯山明氏が直接集会に出席し、集会に参加し得なかった中村元氏も紀要に論文を寄稿している。

既述の通り仏滅年代論は学界懸案の大問題で、洋の東西を問わず過去幾多の研究史を記録しながら未だに結論を見ず、将来ともこの問題に最終的決着をつけることは不可能と思われるが、この機会に当代一流の学者がこれまでの研究を批判的に回顧し、問題点を整理し、専門、非専門のそれぞれの立場から直接的間接的に仮説を出し合って討議の場を持つ事は極めて有意義である。その意味でその成果がここに各冊500頁を超える大冊となって出版された事の意義は極めて大きい。この企画は第三巻の出版を以て完了し、最終巻は目下印刷中であるが、それが完成した暁には研究者の座右の書となるであろう事に筆者は疑いを挟まない。

本論に先立って H. Bechert は序文 (Introductory Essay: The Scope of the Symposium and the Question of Methodology) を執筆し、極めて要領よく全体を鳥瞰する。次いで編者が尊敬してやまなかった É. Lamotte の仏教史の古典的名著 *Histoire du Bouddhisme Indien* よりその該当部分 (La Date du Buddha) が転載されているが、これは第2巻第9章 (pp. 365-526) に呼応している。何故ならそこには仏滅年代研究に今や古典となった論文13編 (N. L. Westergaard, T. W. Rhys Davids, J. S. Speyer, Don Martino de Zilva Wickremasinghe, E. Hultzsch, G.C. Mendis, B.M. Barua, S. Paranavitana, P.H.L. Eggermont, A. Aryasinghe) の原文が掲載されている故である。

本論は、部分的に用語の異同を残しつつも両部 (Part I, Part 2) に略々共通した標題を持つ次の8章より構成されている。参考のため各標題の下に第1巻と第2巻に収められている論文の数を併記する。

- |   |                      |         |
|---|----------------------|---------|
| 1 | 東西の研究史概観             | (3)(2)  |
| 2 | インド文化史よりみた仏滅年代       | (10)(3) |
| 3 | インドの伝承               | (7)(3)  |
| 4 | 上座部の伝承               | (5)(1)  |
| 5 | 後期インド及びチベットの伝承       | (3)(3)  |
| 6 | 中央アジアの伝承             | (2)(3)  |
| 7 | 東アジアの伝承              | (4)(1)  |
| 8 | 軸時代論と仏滅年代論、西洋古典学との比較 | (2)(1)  |
- この目次によって知られるように、各章の執筆者の数は必ずしも均等で

なく、全53論稿の中、第2、第3章に約半数の23編が集中している。

全1050頁に及ぶ本書の内容を逐一紹介する事は紙幅の許さぬ所であり、且つ又筆者の能力を越えているので、便宜上次の2つの原則に従う事とした。先ずこの研究集会について既に山崎元一(「仏滅時代シンポジウムに参加して」東方学77,1989, pp. 167-176)、松村恒(Analecta Indica 親和女子大学研究報告24, 1991, pp. 43-62)両氏が他に邦語によって紹介しているから、それらとの重複部分は必然的に省かれる。第二に本邦学者の論文は既に邦語によっても発表されているのでそれらをここに紹介する必要はない。これら二点を除いても、筆者自身の理解の深淺の度合によって全てを均等に紹介することも不可能である。絶対的基準の立たぬまま不統一、不備を自覚しつつ、以下に従来比較的等閑に付せられていた仏教外の間接的資料による仏滅年代論を盛る第二章を中心として紹介する事とした。尚、文中の(1)(2)は本書のPart 1とPart 2を指示している。

### 第一章

東西の研究史概観は先ず J. -U. Hartmann の英語で発表されたインド、セイロンの学者による研究史によって始まり、次に G. Roth は Hindi 語で発表されたもの (Rāhula Sāṃkr̥tyāyana, J. Bhaṭṭ, Pt. Bhagavad Datta) を紹介する。H. Braun は P. A. Bigandet (1813-94) の英訳によって西洋に紹介された Mālālaṅkāra-vatthu (1798) のビルマ語原典を精査し、従来の誤解を訂正した。その英訳によって仏滅年代論を立論した学者がある故である(1)。S. Dietz は16世紀以後旅行者、宣教師によって西洋に仏教の存在が知られて以来、1980年に至るまでの欧米の研究史を3章70頁に亘って綿密周到に概観し(2)、中村博士(1)と陳延輝は夫々日本と中国の研究史を紹介している(2)。

### 第二章

H. Härtel は佛一代に由緒ある Kuśinagara, Bodh Gayā, Rājagṛha, Sārnāth, Kauśāmbī, Śrāvastī, Vaiśālī, Lumbinī における考古学研究の現状を概観した後、Kapilavastu の問題点、Tilaurakot か Piprāhwā - Ganwarīa かを論じ、後者により高い可能性を帰する。考古学的視点よりは Short Chronology を可となす。G. von Simson はかつて W. Ruben が Gupta 以前のインド史を6期に分けた中の第3期(550-325)の社会経済的背景(都市の成立)を論ずる。佛が弟子を集めて教団を造り、雨安居に長期一ヶ所に滞在するには在俗信者の援助を必要とする。彼等を保護したのは都市の地主商人医者娼婦の類であった。又佛が中道を説いたのも両極説の存在を予想するから、その視点から Short Chronology を可となす。H.

Kulke はガンジス河畔の都市の形成と藩主の出現、更に統一国家の成立を考古学的、歴史学的に辿り、その枠内に於いて仏滅年代論を立てる。仏滅年代決定に批判的であるが、Short Chronology に加担している。土田氏の論稿を挟んで、A. Mette はジャイナ聖典の bahiddhādāṇa と仏典に見える bahiddhārammaṇa とを対照しつつ仏滅年代の決定がジャイナ聖典成立史に貢献する所以を説く。P. H. L. Eggermont は後述の彼の仏滅年代論同様、Mahāvira の年代を大幅に下げる(314-252BC)。G. Obeyesekere は Mahāvamsa 38-39 に語られる Dhātusena 王の一代記を数多くの民話伝説と比較して極めて興味深い物語を再構成し、その間に 18, 100, 10, 9 の Standard Category Number を摘出する。政治的、宗教的偉人の生涯を伝えるには歴史的年代より、神話化、伝説化に後代の人の関心があり、その為にこの種の特殊な「数」が屢々決定的となるから、仏滅年代決定にも「数字」は Chronological specificity を伝えても accuracy を伝えないとして本論中異彩を放つ論稿となった。O. von Hinüber はアソカ王碑文の言語と所謂 langue précanonique (Lévi), Old Ardhmāgadhī (Lüders) として想定再現され得べき仏説法の言語との時代差を言語史的に計量する事が可能であるか否かの問題を取り上げ、それを否定的に答える。仏説法の言語 (langue précanonique) の確定が優れた学者の努力に拘わらず尚道遠き故である。他に著者は幾つかの問題点を指示した。仏母 māyādevī = mātādevī, isi-patana (\* ṛṣya-vṛjana Caillat) 等。S. Lienhard はかつて Thera-theri-gāthā の幾つかの詩が古典インド抒情詩史上極めて重要である事を指摘したが (JA. 263, 1975), その立場から仏滅年代を論ずるには Short Chronology を可としている。W. Halbfass はインド側に yavana/yauna/yona, ギリシャ側に garmanes/sarmanai/samanaioi を立て、両語の歴史を検討しつつ、ギリシャ語文献に最初に仏の言及されるのは Clement of Alexandria (ca. 150-215), 又仏教徒へのそれは Porphyry/Bardesanes である事を明らかにし、更に 300BC, Pātaliputra に滞在した Megasthenes が仏陀、仏教徒に黙して語らないのは当時仏教が尚未だ特に言及される程有力でなかった事を指示すると為す (1)。彼は更に仏陀と Epicurus に別稿を用意し両者の関係を否定的に論じる (2)。L. Schmithausen はアソカ王碑文に言及される仏教思想を精査し、教理発展史の視点からアソカ王と仏陀の間にどの程度の時間的距離を測定し得るかの問題を文献学的方法により極めて良心的且つ徹底的に論じた。アソカ碑文研究として重要で、方法論的にも間然するところが無い。先ず碑文と仏典 (Schism Edict と Bhābrā Inscription: Muni-gāthā, Moneyasūte, Upatisapasine) を比較し、そこに説かれているものが隠遁苦行者の徳、就中不妄語

(musāvāda) 称揚の事実を明らかにし(2-1)、次いで palisava āsinava を取り上げ、前者が碑文に在って apuna (apuṇya)、後者が pāpa (kayāna kalyāṇa の反対) の義に用いられている事を確認する(2-2)。更に来世観 (palaloka) に移り、それが天界 (svarga) と同義に用いられ、又碑文に輪廻、地獄の観念の現れていない事を確認する(2-3)。これらを通覧して王の説く仏教が在家的、道徳的なもので生天倫理を眼目となし、必ずしも高遠な宗教的真理を説くものでなかった事を明らかにする。更に碑文に見える「不殺生」の検討に入り、生物 (prāṇa) を動物のみに限って、植物を含まない事情を確認し(2-4)、最終章では「廻向」「転輪聖王」の思想が碑文に見えない事を確認している(2-5)。H. von Stietencron はかつて F. E. Pargiter, W. Kirfel の企てた方法論と原典批判の成果を踏まえ M. Smith の研究を批判しつつ、王統正嫡の系譜を盛る Bhaviṣya Purāṇa (現存のものに非ず、古い諸 Purāṇa, Harivaṃśa に言及されるもの) の Vaṃśānucarita 部分を検討して、Nanda, Maurya 朝の系譜を確立し、Magadha 周辺の年代譜 (Ajātaśatru, Pradyota, Prasenaṅga, Udayana) を勘案しつつ仏滅年代を論じる。その結果、所謂セイロンの年代譜 (longer, and corrected longer chronology) がもと Purāṇa の計算によっていた事実、又はそれが Megasthenes の伝える所と符合する事を明らかにしている(2)。

### 第三章

仏滅年代論に指導的役割を果たした A. Bareaux の論稿(松村氏の邦訳あり)に続いて H. Bechert は三つの主要年代論、衆聖点記、その他諸説を順次批判的に紹介した後、仏般涅槃をアレキサンダー大帝のインド遠征よりさほど遠くない頃(400-350B. C.)に位置せしめ、従ってアソカ王時代には仏教は未だほんの若い宗教運動に過ぎなかったものと想定している。P. H. L. Eggermont は種々の伝説伝記の平行に着目して Aśoka と Ajātaśatru を同一人と看做し、新説を発表した。それによると仏滅は261B. C. とされる。その後に K. R. Norman(400B. C.)を中に挟んで平川、中村、山崎氏の論文が続いている(1)。A. K. Narain は Ahraura, Minor Rock Edict に見える256の数詞を重視して、碑文中の文言自体 (lāti, vyuthena) に新解釈を施し、それが王の即位11年、25年、37年に発布された可能性を確認した上で、483年説(264-37=227, 227+256=)に最大の可能性を帰し、ここより Dīpavaṃśa, Mahāvāṃśa の年代が由来したと推定する。又543/544年説は仏滅と仏誕を混同した結果(483+80=563)に更に伝承の間に20年の誤差を生じたものと推定している。尚、彼は数少ない南伝説支持者の一人である。次いで、R. Walldén は Tamil の叙事詩 Maṇimēkalai が三度、予言の形で仏の誕生に言及している事実 (XI. 29-49, XII. 72-103, XV. 20-32) を取り

上げ、関係箇所原文と英訳を載せ、この叙事詩の著書が当時南インドで一般に行われていた伝承に準拠している事実を指摘した。又、湯山明氏は仏教梵語の pañcā-śati の用例を集め、500. 50の問題を扱った (śati < śata, śati < śati in viṃ-śati, triṃ-śati)。

#### 第四章

先ず H. Bechert が所謂セイロン所伝仏滅年代論の起源と伝播を論じた後、C. Mallebrein は仏滅後1813年建立の銘文を有する Puruṣottamasīṃha 王の Bodh-Gaya 碑文を取り上げ、A. Cunningham に始まるこの碑文の研究史を概観した後、1269-70A. D. の年代を確定して、その仏滅年代がセイロンの un-corrected chronology に拠っている事実、並びに往時この地にセイロン仏教徒の影響のあった事を結論する。次いで M. R. Pant は Nirṇayasindhu, Hevajraprakāśa の関連箇所言及しつつ、Nepal の仏滅年代論が544年説に拠っている事実を紹介している。又 P. Kieffer-Pülz は前世紀セイロンに起った「復興主義」仏教運動が喧伝した仏滅年代論を概観し、更に M. Sarkisyanza は1956年に催された仏滅(544B. C.)2500年記念の所謂 Buddha Jayantī の背景をなす Diyasēna Myth とその政治権力による利用 (Bandara-naïke, U Nu, Lon Nol) の実態を概観している。第二部は R. Gombrich の論稿一遍を掲載している。

#### 第五章

G. Grönbold は後期 Tantra 文献が仏滅年代論に關する所少なしと前置きして Mañjuśrīmūlakalpa, Kālacakratānta, 並びに Tantra の学匠 Śākyaśrī-bhadra の所説を紹介する。後者が544年説に拠っている事は注目さるべきであろう。C. Vogel は Bu-ston の仏滅年代関連箇所を訳出し、P. Kvaerne は Bompo 学匠 Nyi-ma-bstan-'dzin(1842)の著作中の関連箇所を紹介し、Bon 教における釈迦牟尼觀(超人, Śvetaketu 菩薩)に言及する(1)。次いで D-S. Ruegg はチベット仏教の仏滅年代論を概観して、ここでは仏三身説に立脚して歴史的仏陀個人により仏法 (dharma) が重要であった事情を述べている。チベット関連に他に二稿あり、E. Zabel と Ch. T. Zongtse が執筆している(2)。

#### 第六章

ここには中央アジア仏教史(Maitrisimit のトカラ、ウイグル語版、並びに Rašiduddīn のインド史に見えるもの) (K. Röhrborn), マニ教文献(W. Sundermann) (1), 蒙古語歴史書 (K. Sagaster), トカラ語文献 (K. T. Schmidt), 中期ペルシャ語 Zoroaster 文献 (W. Sundermann) に言及される仏滅年代論が紹介される(2)。尚、コータン・ソグド語仏典には仏滅年代論が言及されてない事実もここに明示された。

## 第七章

H. Franke は中国正史における年代意識の特徴(誕生日, 命日を重んじても年忌への関心の不足)を踏まえ(従って4月8日と2月15日), 中国仏教における正像末意識の背景と仏の老子化身説に關説しつつ, 中国の諸種の仏滅年代論を紹介する。碩学の所論は傾聴に値し, 問題の所在が明示されている。同様に L. Lancaster も仏滅年代と末法思想の關連を説く。H. Durt は朝鮮並びに日本の仏滅年代論を歴史的に概説し, 既述の H. Franke の所論と相まって極めて要領よく問題点を明示した。今後末永くこの分野に於ける標準的論説となるに違いない。次いで Bhikkhu Pāsādika は紀元一世紀に始まるベトナム仏教史を概観し, この間に義浄の南海寄帰内法伝の記述, 康僧会の問題, 牟子の理惑論, 沙弥律儀要略増註に言及しつつ the World Fellowship of Buddhism, Vietnamese Unified Buddhist Church の誕生と, それによる544年説の採用の事情と説く(1)。又 E. Rosner が Yu Cheng-hsieh の仏滅年代論を紹介している(2)。

## 第八章

直接仏滅年代論に関係しないが, 比較思想(1), 比較研究(2)の立場からの論説三編が掲載されている。哲学者 K. Jaspers の Achsenzeitkultur の視点から仏滅年代を眺めようとする試みに N. Eisenstadt, R. Wenskus の二論文がある。西紀前500年前後を世界史上の思想的・一大変革期 (tiefeste Einschnitt der Geschichte) と看做し, Parallelentwicklung の現象に Stimulus-Diffusion の概念を導入した時にどのような事を考え得るかを論じる。結論を導出するに極めて慎重であるが比較思想史研究家に示峻する所があるに相違ない(1)。C. J. Classen はギリシャ, ローマ史における歴史上の人物や事件の年代を決定する際の古典期並びに, 近代学者の試みを紹介し, 方法論とその限界を述べる。仏滅年代方法論と比較して極めて興味深い(2)。

概して Short Chronology への傾斜が顕著で, Long Chronology の支持者は少数派となっているが, 問題への Approach が地域的, 方法論的に極めて多角的で, 執筆陣に絢爛豪華を競い, 内容は豊富の一語に尽きる。仏滅年代算出の礎石となっているアソカ王 アレキサンダー大帝の問題も随所に關説され, 本書はその意味でただ単に仏教学者のみならず, アソカ王碑文を中心とするインド古代史家を始め, 広くインド学に関心を有する者一般にも極めて有益である。編纂者 H. Bechert 教授のこの画期的な試みに払われた熱意と努力に対して敬意と感謝の念を新たにする者はひとり筆者のみに留まらぬであろう。

*The Dating of the Historical Buddha, Die Datierung des historischen Buddha* (*Symposien zur Buddhismusforschung, IV-1 and 2*), edited by Heinz Bechert (*Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse, Dritte Folge Nr. 189, 194*), Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1991 and 1992, Part 1, xv-525, Part 2, x-530.

ハインリッヒ・フォン・シュティーンクロン編

### 叙事詩とプラナーナの文献目録（1985年迄）

原 實

Tübingen 大学教授 H. von Stietencron が主催する Tübingen-based Purāṇa Project は過去その第 1-2 巻として Brahma purāṇa の批判的出版と語彙索引、内容解説の 2 大冊を公にし、筆者も本誌において両書を紹介する機会があった（東洋学報72, 1990, pp.166-7）。その企画はその後も順調に継続され、その第 3-4 巻が同じ装いの下に総2116頁の大冊となってここに出版された。

インド学の諸分野においてこれまで幾つかの文献目録が企画され、Veda 学には夙に L. Renou: *Bibliographie védique* (Paris 1931) があり、その他オランダの Kern Institute 刊 *Annual Bibliography of Indian Archaeology*, 又仏教学には *Bibliographie bouddhique* (Paris 1930-1967) 等を数え得るが、現在もお進行中のものとして R. N. Dandekar: *Vedic Bibliography I-IV* (Poona 1946-1985), K. Potter: *Bibliography of Indian Philosophies I-II* (Delhi 1970-1983) が存在する。しかし、膨大な叙事詩並びに Purāṇa 文献に関しては極めて部分的なものを除き、かつてこの種の試みがなされなかった。他方 Purāṇa 文献に関しては近時 Ludo Rocher が有名な J. Gonda の企画 *History of Indian Literature* の一環として *The Purāṇa* (Wiesbaden, 1986) の名著を世に送り、この膨大な文献群への鳥瞰を与えた事は記憶になお新しく、筆者も本誌にそれを紹介した（東洋学報72, 1990, pp.170-168）。両叙事詩の批判的出版も完成し、夫々に *Pratika-Index* も用意され、優れた翻訳も進行中である現